家作風の特徴も盡く之を信ずることが出來ずして銘文研究の後に更定を要するものが多々あるべきを疑ひ得る。

劒話錄に見えた裏前友成の刀に關する故今村翁の話に嘉禎年號の裏銘ある友成が古備前で通用する傑作で、奸商が年號を磨滅して賣り込んだとあつて、翁は友成が嘉禎にも一人あつたと考へられた樣であるが、或ほ嘉禎は磨上銘の年號で實物は矢張り古備前友成であり得ると想はれる。此の如き誤謬に陷れば同名の刀工が何代もあるとされ得る。刀工系圖に見る同名數代が若し此の如き誤謬に基いて整理され來つたとすれば之に盲從することは非常に危險である。

本稿に論及せぬ所及び研究の進行によつて訂正を要することは他日續稿によつて大方の一顧を乞ふことにする。(甲子十二月三日稿)

古銀銅面考

文學博士　濱田耕作

一

京都帝國大學文學部の考古學陳列室の藏品中に薄い銅及び銀の板で打出した面が四枚ある。是は一昨大正十二年五月大阪の山中商會の支那古美術展覽會に出品せられ當時の目錄には「秦銅面」と稱せられたものである。私は之を一見して頗る珍らしい品物であると思つたが、其後圖らず小川爲次

郎氏の示唆によつて、山中定次郎氏から大學に寄贈せられることになつたのは洵に意外の喜びであつて、我々が深く山中氏の厚意に感謝を表する所である。

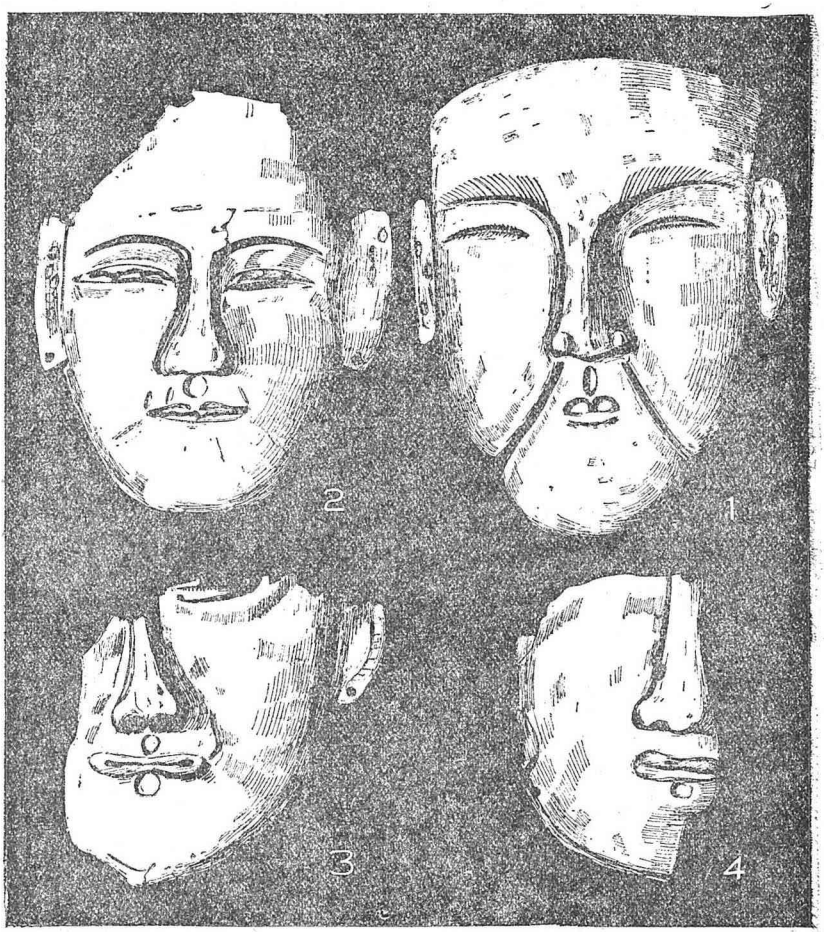
然るに其後件の展覽會の出品物を編纂して、大村西崖氏が「獲古圖錄」二卷を出版せられたが、其の上卷には此の面を輯錄して、左の如き說明が下されてある。

「第四十四假面　四枚あり、其一は銅鏁、其三は銀鏁を槌して之を作り、銀の二面は金からず、鏁鏁の假面は未だ會て金石の著錄に見えずと雖も、北陲蒙古の境に於いて葬る時屍の面を掩ふに用ゐし物なりと云ふ。今後更に類品の出土あらば、其年代等の考證を得ることある可し。」

卽ちこれには其の出所が蒙古の境であることゝ、葬儀に際して屍體の面を掩ふたものであると云ふ新しい事實が加つて秦代のものとはなつて居ないのである。私はこれ以上に何等此の遺物に關する報道を有してゐないのであるが、洵に大村氏の言の如く此者は從來支那の金石の著錄にも全く見えて居ない珍らしい品物であるから、左に其の形制の如何なるものであるかを記載し、併せて之に關する私の所見をも述べて見度いと思ふ。

二

大村氏は四枚のうち其一は銅鏁と記されて居るが、實は其の二枚が銅鏁であつて最も完全に保存せられ且つ最も大きいのは其の中の一箇である。それは裏面には靑錆を出して居るが、表面はなほ金色の輝いて居る處から見ると、元と鍍金を施したものに相違ない、長七寸五分、厚二厘許の薄板を木型の上で槌起した打出し浮彫（repoussé work）の手法に成るものである。額上生え際は一文字の弧線をなし、周緣は切り離しの細工で、眉と鼻と



第一圖　支那北疆發見銀銅假面（島田氏圖）

は連續し、眼は閉ぢた形を現はし、鼻下の凹線は小さいが著しく、口は小さく上下兩唇を明かに區別して居る。而して特に目立つのは鼻側から頰に至る溝線の八字狀をなし、顏の輪廓と兩頰と頤部とに區分して居ることである。目に細長く二三の窪みを打込んで細部を示さうとして居るが、これは甚だ不充分である。併し眉上には細い刻線を以て眉毛を現はし、眼睫の毛は細線を

以て示して居るのは特に注意す可き點であらう。男女孰れを現はしたとも斷じ兼ぬるが、其の優しい風貌は、此の假面に於いて特に女子とも思はしめる處がないでもない。（第一圖1）

次に銀鏁の二面は共に紫黑色を呈し、其の一はたゞ額の兩側を缺損するのみで、殆ど全形を存して居る。是は長六寸四分、厚二厘弱の薄板を槌起したことは、前者と同樣であるが、眉に稍々低く口は不整形で、鼻孔其び眼と共に不規則な裂孔を穿つて居る。耳は稍々大きく、其の朶端に各一箇の孔を開いて居るのは前者に見ない處であるのみならず、右耳の附着部の上下には細孔を穿つてある。（第一圖2）

銀鏁の他の一箇は手法之に類似して居るが、眼の上部と右頰とを缺損し、大きく鼻孔を穿ち、口唇は稍々突起し、之に裂孔を開いて居る。而して左の耳朶には小孔を穿つて居るのみならず、其の

下方頰緣にも圓い孔を通じて居る。（第一圖3）銅鏁の斷片一箇も製作は寧ろ此等銀板のものと相似て、鼻孔を通じ口には裂口があり、兩耳は缺失して居るが、頰下の緣邊に小さい孔を通じてある。なほ此の面の表にも鍍金の形迹はなく、其の裏には青鏽の間に麻布の如きものゝ附着した痕迹を殘して居るのは注意す可き點である。（第一圖4）

三

以上は此の銀銅面の形制の一般であるが、我々は此等四枚のうち鍍金銅面一箇と、他の銀銅三箇との間に、手法上著しい差違の存することを認めざるを得無い。卽ち前者の技術は槌起の手法として稍々熟練の程度にあるもので、且つ眉目鼻口等の器官は頗る形式化し、全體として幾分規矩的（ステレオタイプ）になつて居るに反し、後者の技術は頗る幼稚拙劣であると同時に、未だ殆ど形式化して居ない。此の

兩者が固より同時に存在し得ないとは言へないが若しも其間に時代の相違を認めるならば、後者は確に前者よりも古い技術に屬するとす可きであらう。

此等の金屬面は果して何に使用せられたものであらうか。所傳の如く葬儀の際面を掩ふた所謂死面（Totenmaske, Leichenmaske）の類であらうか。之を製作の上から考へると、其の資料の弱い薄板で作られて居る點から見ても、到底演劇用戰鬪用若しくは他の永久的用途に供せられるものと想像することは、不穩當で全く一時的の用途を有して居つたものとす可きである。此點に於いて葬儀用の死面とすることは最も適當な見方であると思ふ。

耳朶にある穿孔は或は之に紐を通じて被用する爲に設けられたものと考へる人があるかも知れない併し假面としては斯の如く動き易い脆弱な部分に紐孔を設けるのは普通ではない。是は寧ろ耳に耳環を附する爲めに穿つた孔を現はしたと見るを穩當とする。頰邊などに在る小孔は之とは異つて、或は紐を通じて他の布片木版等に附着する爲に穿たれたものと解釋す可きであるが、果して如何なる具合に附着せられたかは、今まだ知る由も無い。

四

私は此等の銀銅面を展覽會場で見た際に直に思ひ起したのは、彼のシュリーマンの發掘したミケーネの黃金面である。是は苟も考古學に多少の趣味を持つて居る人の誰人も同樣に聯想する所であるが、私は幸にも雅典の國立博物館に於いて其の實物を一見する機會を得たので、一層深い印象を受けたのである。それで私は是から斯の如き死面の使用が世界諸民族に行はれて居る事實を述べるに當つて、先づ此の最も顯著なるミケーネの黃金

假面に就いて記さなくてはならない。

シユリーマンは希臘のミケーネ(Mykenae)の獅子門の內側所謂「アゴラ」と稱する地域で、竪穴(シャフト)の古墓數個を發掘したがその中第三、第四、及び第五の墓から凡てゞ七枚の黃金製假面を發見した。二枚は小兒の屍體に屬し、極く薄い金葉板を顏面に壓捺して作つた眞の死面で、他の五面は大人の男子に附隨し、稍々厚い金の薄板を木型上に打出したものである。此等の多くは楕圓形をなし、細い閉眼の死貌を示してゐるが、或者は圓い大きな眼を現はし、且つ大きな口を有する奇怪の相貌を有して居る。第五墓出土のものは鬚髯を具へ、耳を特立して現はし、餘程形も整つて居るが、他の多くは頗る古拙幼稚の技術に屬するものである。(第二圖)

此等の面の或者には、耳邊に小さい孔を二つ穿つて之に紐を通じて顏面に固定せしめる樣にしてある具合は、初めに紹介した支那北疆發見のものと同じである。且つ假面全體としても頗る酷似して居るものと言ふことが出來る。シユリーマンは此等の假面を發見した墓を、ホメロスの詩中にあり、パウサニアスの記事に出てゐるアガメムノン、カスサンドラなどの墓に擬定したが、是は固より信ず可くもないことであるが、とにかく西紀前千五百年にも溯る可き所謂エーゲ文化のミケーネ時代の遺物であることは論の勿い所である(Schliemann,Mycenae; Schuchhardt,Schliemann's Ausgrabungen; Frazer,Pausanias' Description of Greece.)

以上のうち小兒の假面は顏面に壓捺して作られたものであれば其の死者の肖像として現はされたことは言を俟たない。又た他の諸面も其の製作に巧拙精粗の別があり、或は眼を開いたものゝ如く見えるのもあるが、一々有鬚無髯其他特殊の面貌を表現するに努めた形跡からも見ても、矢張り一々の死者の肖像として作られたものであることを

第二圖　希臘ミケーネ發見黃金假面

察することが出來る。

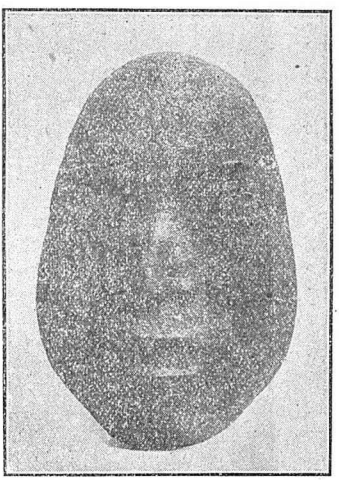
五

ミケーネを別にしてエーゲ文化の時代又た後の希臘に於いては演劇の際所用の假面（Schauspielmaske）などの外、死面の發見に就いては殆ど聞かないが、伊太利に於いてはエトルスキは夙に土製若しくは青銅製の死者の假面を造り、或は體部までをも模したものを作つた。而して羅馬人も亦た此の死面を作り、貴族などは祖先の蠟面を其の廣間に懸けることがあつた。羅馬に於ける肖像彫刻の盛んであつたことも、根本には此の死者の假面

と關係あるものかとも思はれる。又た希臘以前の古い埃及人も此の死面を作つたもので、マリエットはラメス二世の子カムスの厚い金面を着けて居るのを發見し、サツカーラに於いてはシカモル樹製の精巧な木乃伊の假面があり、是は表面を麻布で被ひ、漆喰を塗り一見赤銅の如く見えると云ふなほ又たメソポタミヤのクユンジツク、古へのカルターゴをはじめ、ダニューヴ河域、ガウル、英國等にも金銀或は陶製（テラコツタ）の假面が發見せられるとの事である。（Beundorf,-Antike Gesichtshelme & Sepulkralmasken. 原書未見）

扨て東歐では希臘文化の影響を受けた南露西亞のケルチ（Kerch）に近いグリニシユケに於いて、一八三七年「黃金面の王后の墓」（Tomb of the Queen with Gold Mask）から金製假面を發見したこれは恐らく石膏の型から作つた實際の肖像であるらしい。更に東方西比利亞のエニセイ河の上流ミヌシンスクに於いては、アドリアノフ氏によつ

てチユード人の古墳から二十枚の石膏假面を發見したが、多くは丹を塗つてあつた。是は銅器時代の火葬墓に屬するものであるが、前記のケルチ附近のものと文化上の關係があるか否かは不明である。（Minns,-Greeks & Scythians; Andree, Masken in der Völkerkunde. Archiv f. Anthropologie. 1886. XVI.）



第三圖　滿洲發見鐵製死面

此他亞細亞に於いてはミヌシンスク以東に、他に如何なる遺物があるかは、我々の銀銅面を以て蒙古境のものとする外に、私の知見に上つてゐるのはたゞ、滿洲の某地で日露戰爭の際獲たと稱する鐵製の假面が一つある（京都帝國大學藏品）。これは內部の充實した頗る重厚なものであつて、其物凄い死

者の相貌は正しく蠟若しくは其他の材料を以て先づ死面を作り、それに鑄鐵を流し込んだものに違ひない。時代に至つては全く其の考證を缺くが、數百年を溯る樣な古いものでは無いと思はれるのみならず、他に斯の如き遺物を見ない處から察すると、特殊の場合に作られたものであらう。(第三圖)

併し金屬製の死面を作ることは支那本土には聞かないが、南方暹羅、東蒲塞に於いては、王者の死んだ時に其の面に黃金製の假面を掩ふことがある。印度支那のシャン族の酋長も死後金銀の假面を被せると云ふから、亞細亞の南方にも此の風習があつたものと思はれる。

六

なほ亞細亞歐羅巴等からかけ離れた他の諸地方にも此の死面の風習が廣く擴がつて居るが、今まで其の三四を擧げると、先づ古代メキシコに於いては死んだ王者の顏に黃金製や、土耳古石をモザイクにしたり、或は彩色をした假面を被せる。北米の塚からは貝殼製の面が發見せられ、又たアリウト島の土人は大きな木製の假面を以て死者の顏を掩ふ。其他祕露カメルン、ケナイ、タヒチ等の住民にも死面を見ることが出來る樣に、一々列擧する煩に堪へない程である。

さて然らば何故に斯の如き假面を死者の顏面に被せて之を葬つたかと云ふに、各民族の間に多少其の傳說意義を殊にして居るにしても、畢竟死者が黃泉の旅路に向ふ際、惡靈などの害を避ける爲め之を保護する卽ち「アポトロパイヤ」(Apotropaia) の意に出でたものである。假面は死者の顏面を保護するのみならず、之によつて死者を神聖にすることが出來ると考へるのであつて、此の點に於いては、神樂舞踏に用ゐる所の假面も、亦た同じく之を著用する神官は此の物の媒介によつて、

神威を現はし、神を代表することに成るのであるそれ故假面は自然民族の間に於いては、常に一の神聖なる品物と考へられてゐる。(Andree,-opt. cit; Hoernes,-Natur-und Urgeschichte des Menschen, &c.)

假面を死者の顏面其者に被せないでも、葬儀に際して死者の親族の者が之を着ける場合はタヒチにある。又た古代の羅馬に於いては親戚其他のものが死者の假面を被つて柩車の後に從つた。此等も矢張死面に密接なる關係ある風習であつて特に葬儀の際假面を被つて舞踊をすることは、アリウト島の土人其他にも行はれて居り、斯の如き死者を崇拜する爲の假面舞踊が段々發達して希臘の悲劇となつたものであるとリツヂウエー氏は論じてゐる。(Ridgeway,-Origin of Tragedy;-Dramas & Dramatic Dances of Non-European Races)

七

支那には死者に假面を着けしめることは無い樣

であるが、假面を着けた者が儀式に出て來ることがある。卽ち「周禮」にある方相氏は是れである。夏官に「方相氏、狂夫四人」とあり、「方相氏掌蒙熊皮黃金四目、玄衣朱裳、執戈揚楯、帥百隷而時儺、以索室歐疫、大喪先匶、及墓入壙、以戈擊四隅、歐方良」と見えてゐるが、方相は註釋者は

第四圖　方相氏(政事要略所載)

放想と同じく畏怖す可き貌を云ふと解してゐるが或は方位を相すると云ふ意で、四目は方角の四つを意味するかも知れない。近世では之を開路神などゝ呼ぶ樣である、(Groot, Religions System of China, vol. I. 其他) それは兎に角、黄金色をした四目の假面具であることは明かで(周禮正義卷五十九)其の二目のものは之を倀と云ふさうである。而して此の方相の假面を着け、玄衣朱裳の服裝で戈と盾とを手にし、厄拂ひをするのが方相氏の職務である。是は王朝の前後から我國にも傳つて、所謂追儺の行事となつたもので、日本でも、方相氏の假面を着けることになつて居た。(第四圖) 京都太秦の慶隆寺で行はれる牛祭に、假面を着けて行事をやるのも、此の儀式と關係あるものであらう。是は卽ちアンドレー氏の「儀禮假面」(Maske im Cultes) である。

今一つの職務は「周禮」にある通り、方相氏が天子の周禮に際して先驅して、墓壙に入り、四隅を擊ち方良卽ち罔両を毆つことをやる。此の事からして彼の開路神と云ふ名も出でたのに相違ない。これは周漢以後長く今日まで支那の葬儀に傳つてゐることで、「漢官儀」に「陰太后崩、前有方相及鳳凰車」とあり、又々葬式の光榮を叙した誄に「華轂曜野、素蓋被原、方相仡々、旌旗翻々」とあるのを見ても、其の狀態を想察することが出來る。(晉書、左貴殯傳) 斯の如く喪禮に假面を着けた方相氏の現はれることはかの羅馬の場合とも酷似し、或は死面から變化したものとも考へられる。孰れにせよカメルンやアリウト島の土人の習俗と、全く同じ意味のものであることが推察せられるのである。

假面は支那では面具と云ひ、或は假面具或は代面具とも書し、前に述べた方相氏のそれの外にも戰爭の時に着けたアンドレー氏の所謂「戰爭假面」(Kriegsmaske) の類もあつた。北齊の蘭陵主長恭が其顏貌の威のないのを隱さんが爲め、戰爭毎に

面具を着けたと云ひ、「宋史」の狄青傳に「臨敵被髮帶銅面具、出入賊中、皆披靡莫敢當」とあるが如きは、その例であつて、是は敵を威す爲めの外、防禦の意味もあつたに違ひない。我が邦の兜に附屬した鐵面も卽ち此の類である。なほ支那及日本に於いて「舞踊假面」(Tanzmaske) 及び「演劇假面」(Schauspielmaske) として發達したものは、唐以後伎樂舞樂に使用せられた豐富なる遺物を、我々は奈良の正倉院や法隆寺東大寺の藏品に有して居りその系統の後世に傳へられた日本の能面に就いては今更言及する迄も無いことであらう。たゞ此等舞樂の面が、支那に於いて唐代に西域や南海地方との交通の結果、其の影響を受けて異常なる發達を遂げたものであることを注意して置かう。

要之、アンドレー氏の言の通り、東亞細亞は暹羅、緬甸、馬來諸島から、支那日本を加へて假面發達の一大中心である、其の次に來るのはメラネシヤ其の次は亞米利加の西北海岸で、是は南北兩洲を通じて、特に動物假面が多い。此の外には亞弗利加にも多少これを見ることが出來る。但しこれは死面のみならず假面全體に關する觀察である。

八

以上私は支那北疆の邊から出たと云ふ銀銅の假面を記載したのを緣として、其の死面としての推定から、世界諸民族の間に行はれた死面の使用に關する顯著な事例を列擧し、なほ死面と關係ある他の假面著用の習俗にも言及する所があつた。此等死面使用の風俗は斯の如く世間に分布して居るが、其の假面の製作には自から二樣の別がある、卽ち一は死者の面貌を型にし若しくは之を模した寫實的のものと、他は恠奇な動物若くは想像的動物等の面貌を現はしたものとのそれである。而して我が支那北邊發見品と稱するものは、此のうち

前者に屬することは希臘ミケーネの黄金假面などゝ同じで、米大陸其他支那の方相氏の假面などの如き恠奇な相貌とは別種である。

然らば此の支那北邊發見と傳へられる假面は、果して希臘ミケーネの物や、ケルチ古墳のものや又た西比利亞ミヌシンスク出土のものなどゝ、歴史的系圖的に關係のあるものであるか否か。固より此等北方亞細亞に於ける文化上の交通は、種々の方面から立證せられることであるが、當面の問題に於いては、一方世界中に廣く行はれてゐる土俗的事例であるから、之を揣摩することは頗る危險であると言はねばならない。又た次に彼の銀銅面は果して何時頃の製作であるかと云ふ問題が之に聯關して起つて來る。當初「秦銅面」と標記してあつた理由は、秦の始皇が天下の兵を銷して銅人十二枚を咸陽の宮門前に立てたと云ふ樣な話から出たか否かは知らないが、若しも此の假面の製作が支那の技術と關係があるものと假定して、其の樣式上の親緣を求めるならば、かの漢代の副葬上偶である土俑などに於いて見る所のアドケない古拙的の風貌を想ひ起すを禁じ得ないのである。而して之を漢代若しくは其れに近い秦としたことは聊か理屈が無いではない。併し精確を期し難い樣式上の研究の性質と、彼の遺品の不明なる出所とはなほ斯の推察をすら躊躇するを賢明とするのである。

出處は不確であり、時代も不明である此の銀銅の古面は併し其れがたゞ支那附近から出たものであつて、世界に廣く行はれてゐる死面の一例であることを知る丈けにしても、頗る興味ある遺物と言はなければならない。況んや若しこれが將來北亞細亞を移動した西比利亞の文化と結付ける所緣ともなつて行つたならば、更に意外の結果を齎すであらう。新年早々死面を擔ぎ出すのは緣起でも

無いが、追儺に於ける方相氏の面具と思へば、年末に之を書き記すのは必しも謂れの無いことではない。而して此の小篇を故原勝郎博士の一周忌の記念として靈前に捧げる。

〔附記〕開路神君に就いては、ホロート氏は「三教源流聖帝佛師捜神記」を引びてゐるが、方相氏が開路神と稱する所以を明にし、支那近世の俗傳を知ることが出來るから、次に之を掲げることにした。「開路神君、乃周禮之方相氏是也、相傳、軒轅皇帝周遊九垓、元妃螺祖死於道、令次妃好如監護、因買相以防夜、蓋其始也、俗名險道神、一名哥陪將軍、一名開路神君、其神身長丈餘、額廣三尺、鬚長三尺五寸、鬚赤、面藍、頭戴東髮金冠、身穿紅戰袍、脚穿皂皮靴、左手執玉印、右手執天罡戟、出柩以先行、能押諸凶煞、惡鬼藏形、行柩之吉神也、留傳之於後也云。」なほホロート氏著書第一卷、圖版第九に開路神の寫眞がある。

尺の研究

文學士　藤田元春

さきに拙稿支那古代の地割について（本誌第八卷一號）和漢の尺には、短いものと長いものがあつて凡四類の區別があることを論じ、其延長の理由に就ては後日を期したのでありましたが、近頃この四類に分つ丈けでは、未だ至らぬと思ふ事實を發見しましたので、結局六種の尺を問題とすることになりました、從つて當時の卑見に著しき訂正を加へたいと思ひまして、再び本誌の餘白を汚す事にしました。本論は勿論尺度變遷の大略を記すに止まりますが話の順序として、第一に度の起源を尋ねて周尺に及び、第二古尺、第三住吉尺